

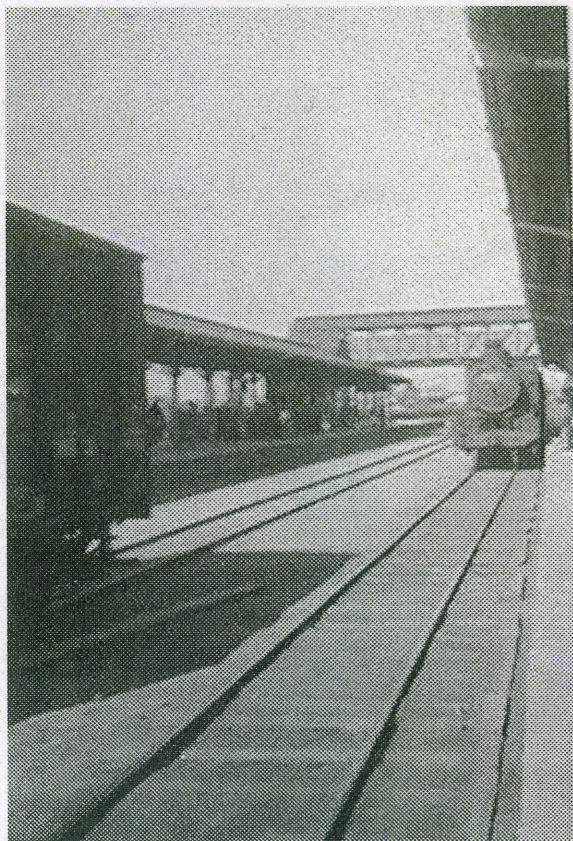
JR松江駅改札口で待ち合わせさせた山崎弘さん(70)が、駅構内の一室に案内してくれた。日本鉄道OB会松江支部のメンバーらが憩いの場になっている部屋。先輩の吾郷進さん(79)と山崎さんは写真の蒸気機関車に見入り、鉄道員との会話が始まった。

「正面の姿からすると『8620型式』ですか？昭和時代初期が全盛で、旅客列車をよく引っぱった陸蒸気でしたかねえ」「いや『C51』かも知れんね」……。

旧国鉄松江駅は一九〇八年(明治四十一年)十一月、米子―松江間の開通に伴い開業。写真は、ドイツ人哲学者フリッツ・カルシュが二七年昭和二年)に撮影した。駅前に住み、駅構内を遊び場として育った吾郷さんは四二年から三十年間、駅の荷物係として働いた。

松江駅

開業で近代化幕開け



1927年の撮影とされる松江駅。蒸気機関車が止まっている

車社会化し、鉄道での運搬は既に下火となっていた。

JR移行と同時に退職した山崎さんは、旧国鉄の資料や島根、鳥取両県の市町村誌など

かつての写真は、若松秀俊・東京医科歯科大学大学院教授の提供

を十数年かけて調べ、「山陰鉄道物語」を二年前に出版した。松江駅については「その開業によって、島根の産業革命と近代化が幕を開けたと言っている」と振り返っている。

受付で荷札を切り、ホームから専用車両に積み込む。荷を傷付けず、行き先を間違えないよう丁寧に確実な仕事を

心がけたという。

「SLだと特に、ほりりと汗まみれでねえ。汚れが目立たないよう、最初から黒いカッターシャツを制服の下に着るんですよ。戦中は、地元

われ、松江駅を去りがたかった。

の親から「遠方の子供らに」と託された統制品の米などを、こっそり本などにしのばせていたが、世の中はすっかり

助役で退任した。その二年後、旅客助役として山崎さんが同駅に赴任。小荷物助役を兼ね

た。吾郷さんはいったん、旧米子鉄道管理局(現JR西日本米子支社)に移った後、七五年に松江駅に戻り、八〇年、

旅

た。吾郷さんはいったん、旧米子鉄道管理局(現JR西日本米子支社)に移った後、七五年に松江駅に戻り、八〇年、

島根の記憶

⑨

旅

現在のJR松江駅。1978年に高架化された

